

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12496

研究課題名(和文)近代日本の漢学塾と知識人の思想形成に関する史料学的研究

研究課題名(英文)Historical research on the formation of ideas of intellectuals and school of Chinese studies in Modern Japan

研究代表者

田中 友香理(tanaka, yukari)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：90756280

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治期の漢学塾の関係史料を悉皆的に調査したことで、近代日本の知識人の思想形成における漢学の役割とその知的ネットワークの広がりを明らかにできた。主な研究対象は、天保4年から明治45年にかけて現在の新潟県燕市に存在した漢学塾である長善館とその館主・塾生の思想と行動である。その関係史料を悉皆的に調査するとともに、史料学的分析を加えたことで、幕末から明治期にかけての漢学塾がいかんして近代化を遂げたか、また地域の知識人がいかなる思想形成を果たし、漢学塾を結節点としていかなる知的ネットワークを構成したのかを考察できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会史における意義：天保4年～明治45年まで存在した長善館に着目することで、漢学塾が地域における知識人ネットワークの形成に果たした役割を明らかにできた。また、県会議員・衆議院議員を務めた塾生のその後の動向を追い、彼らが長善館での人脈や修学内容をもとに治水事業に携わり、近代日本の「国土」や「国権」を重んじる政治集団の一角を形成していたことを明らかにした。思想史における意義：二代目長善館館主の三男で、京都帝国大学の漢学者・鈴木虎雄に着目し、その思想形成における「家の影響を明らかにした。史料学における意義：「家」「家族」「家業」に関する包括的な私文書の整理を行い、その構造と伝来を把握した。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the role of Chinese studies in the formation of ideas of modern Japanese intellectuals and the expansion of their intellectual networks by comprehensively investigating the historical materials related to Chinese studies in the Meiji era. The main research subjects are the thoughts and actions of Chozenkan, a Chinese school that existed in Tsubame City, Niigata Prefecture from the 4th year of Tenpo to the 45th year of the Meiji era, and its owners and students. By thoroughly investigating the related historical materials and adding historical analysis, how the Kangaku Juku was modernized from the end of the Edo period to the Meiji era, and what kind of thought formation was achieved by local intellectuals. , I was able to consider what kind of intellectual network was constructed with the Kangaku Juku as a node.

研究分野：日本近代史

キーワード：漢学塾 地方名望家 長善館 鈴木虎雄

1. 研究開始当初の背景

近代日本における漢学塾についての先行研究としては、池田雅則『私塾の近代』(東京大学出版会、2014年)が挙げられる。同書は長善館の講義内容に着目し、教育学の手法によってカリキュラム編成の変化を追うことで、同館が「ノンフォーマルな教育機関」(34頁)として公教育とは異なる役割を担ったとした。同書は教育史の発想に立ったものであり、本研究では長善館に関する史料の悉皆的な調査と分析によって、長善館の教育の実態と門下生の広がり(進学先や就業の在り方)、館主とその家族による漢学の継承の在り方等を明らかにすることで、その日本近代史上における意義を講究し、近代日本における地方に対する東京(首都)の優越、伝統思想に対する西洋思想の優越という一般的な理解を批判したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、以下の3点の目的を有した。第一に、近代日本において漢学塾という前近代的な教育機関が、明治維新以降においていかなる役割を果たしたのかを解明することである。明治維新以降、官立学校を中心として、西欧の学問(洋学)による教育が行われていたが、ことに東京以外の地域では前近代から続く漢学塾(私塾)がなお重要な教育機関として存在し続けていた。その機能と意義を考究したいと考えた。

第二に、近代日本における漢学思想と知識人の思想形成の関係である。長善館は、当初は漢学を教授しながらも、次第に英語や数学も教授するようになった。とくに3代目館主の鈴木時之介(彦嶽)とその兄鹿之介は、上京して同人社、東京専門学校に入学し、一時は洋行も企図していた。その弟である虎雄もまた東京に出て東京帝国大学で学位を得た。彼らの思想形成がいかになされたのか、漢学と洋学の関係だけでなく、思想形成の場としての家族や家に着目するなかで明らかにしていきたいと考えた。

第三に、漢学を中心とする地域における知的ネットワークの広がりを把握することである。池田氏が明らかにしたように、地域における漢学塾は在地の地域指導者層の需要に支えられており、地域指導者層は詩会や漢詩の交換をとおして交流を図っていた。本研究では、それだけでなく、長善館の塾生たちが村長や県会議議員といった政治的指導者になったことに着目し、その精神性(エートス)が学問にとどまらず政治の世界に及ぼした影響を考えた。

3. 研究の方法

まずは長善館と歴代館主を務めた鈴木家に関する史料を悉皆的に調査した。新潟県文書館や長善館史料館、筑波大学附属図書館、御子孫のお宅と中心として調査し、史料の全体像と構造を明らかにした。

それを踏まえて上記目的第一については、教育内容や塾の運営方針、塾生・館主の交流の在り方を分析する必要があるため、講義録や講義筆記、書簡、日記の分析を行った。上記目的第二については、とくに鈴木虎雄や時之介、鹿之介に着目し、彼らの読書・学習内容を日記や書簡から明らかにするとともに、それだけでなく、漢学塾主宰を「家業」とした鈴木家の「家」「家族」が思想形成に果たした役割を明らかにした。上記第三の目的については、長善館と鈴木家の史料だけでなく、塾生の史料(日記や書簡、講義筆記)を調査、収集しつつ、衆議院や県議会の公文書にも積極的にアプローチし、門下生の広がりを把握した。

4. 研究成果

本研究を遂行するために、まずは、すでに整理、目録作成を済ませていた燕市長善館史料館所蔵「長善館史料館所蔵資料」(中野目徹・田中友香理ほか編『長善館史料館所蔵資料目録』燕市教育委員会、2017年)筑波大学附属図書館所蔵「鈴木虎雄関係史料」の調査を進めるとともに、新潟県文書館「長善館学塾資料」でも調査を重ね、長善館をめぐる史料の構造と伝来を明らかにした。さらに、長善館史料館と筑波大学附属図書館所蔵の書簡と新潟県文書館所蔵の歴代館主の日記を翻刻、データ化した。

以上を前提として、上記第一の目的については、日記と書簡の翻刻とデータ化を図り、とくに翻刻した日記は中野目監修『日記で読む長善館』(燕市、2021年3月、第5、6章翻刻・解説担当)として刊行し、講義の実態と地域における塾生の広がりを把握した。池田氏の指摘したとお

り、長善館は地域指導者層の教養を学ぶ場としての役割をおっていたが、それだけでなく、「立身出世」を目指す青年を東京の高等教育機関に送り込むという役割も担っていたことを明らかにし、長善館が漢文学の泰斗である鈴木虎雄だけでなく、同じく漢学者の小柳司気太、桂湖村、そして小柳卯三郎や大竹貫一、萩野左門といった中央政界で活躍した政治家をも輩出した点に着目し、地域の私塾での教育や人脈が強烈な個性や固有性を有する人材を育成し、学問と政治の両局面において近代日本の発展の一端を支えたことを明らかにした。

それは第三の目的と関係している。第二の目的については、2代目館主の鈴木健蔵が幕末に草莽の志士として尊王攘夷運動に身を投じ、明治20～30年代には元塾生の大竹貫一らとともに条約改正反対運動～対外硬運動に携わったことを明らかにし、同運動の地域における実態に迫ることができた。また、大竹や萩野左門はこの後も国権の確立を重視する代議士として活躍し、大河津分水建設をはじめ一貫して郷土にも尽くしており、健蔵から伝えられた長善館の精神が彼らの内面に息づいていたことを明らかにした(上記『日記で読む長善館』)。つまり、長善館の門下生は、近代日本における「国土」や「国権」を重視した政治集団の一角を占めていたといえるのである。

上記第二の目的については、田中友香理「家族 長善館と鈴木家」(中野目『近代日本の思想をさぐる』吉川弘文館、2018年)、中野目徹・田中友香理編『陸羯南高橋健三往復書簡』(田中研究室、2021年)において、鈴木家の「家」と「家族」の実態を明らかにし、その「家業」について、一方では中央において虎雄が学術として発展的に継承し、また一方では兄の時之介が地域指導者層の子弟教育の用具として継承したことを明らかにした。虎雄の学問は京都帝国大学、京都大学で着実に継承される一方で、時之介は漢学だけでなく東京で学んだ英語や数学を塾で教授し、優秀な塾生を地域の指導者として育成するとともに、一部の塾生の「上京」と「遊学」を支えたことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 田中友香理 | 4. 巻 0 |
| 2. 論文標題 長善館と鈴木家 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 近代日本の思想をさぐる 研究のための15の視角 | 6. 最初と最後の頁 45-64 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|-----------------------|
| 1. 発表者名 田中友香理 |
| 2. 発表標題 鈴木虎雄と長善館 |
| 3. 学会等名 近代新潟人物史研究会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 中野目徹 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 新潟県燕市 | 5. 総ページ数 452 |
| 3. 書名 日記で読む長善館 鈴木家三代の幕末～明治 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

大河津分水と長善館門下生のかかわりについて、2022年8月29日に燕市主催の「燕大学」において講演「長善館門下生は大河津分水にいかに関わったのか」を発表する予定である。

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 中野目 徹 (NAKANOME Toru) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|